

主の再臨

ルカ福音書21:25-38 (新改訳2017訳)

- 21:25 それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。
- 21:26 人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。
- 21:27 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。
- 21:28 これらのことが起こり始めたら、身を起し、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているからです。」
- 21:29 それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。
- 21:30 木の芽が出ると、それを見て、すでに夏が近いことが、おのずから分かります。
- 21:31 同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは神の国が近いことを知りなさい。
- 21:32 まことに、あなたがたに言います。すべてのことが起こるまで、この時代が過ぎ去ることは決してありません。
- 21:33 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。
- 21:34 あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされていて、その日が異のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。
- 21:35 その日は、全地の表に住むすべての人に突然臨むのです。
- 21:36 しかし、あなたがたは、必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」
- 21:37 こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた。
- 21:38 人々はみな朝早く、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとにやって来た。

【祈りながら考えよう】

- (1) キリストの再臨に先立って、天変地異はどのように起こりますか。
- (2) 再臨のキリストはどのように現れますか。
- (3) 空中再臨（携拳）と地上再臨の関係を分かりやすく説明して下さい。

【解説】

(1) 再臨の前の天変地異

《それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。》

この箇所に記載されている自然界の激動や地殻の激変は、キリストの再臨に先立って起こる出来事である。太陽や月をはじめとした天体の異変が、地上ではっきり見られるようになる。天体は軌道をはずれる。

そのため、地軸が傾いてしまうかもしれない。太陽と月の引力が変化し、その結果、海に生じた大きな波が地上の物を押し流す。様々な天体が地球に衝突しそうになり、人類はパニックに陥る。しかし、敬虔な者たちには希望がある。

(2) 再臨の主の現れ

《そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。これらのことが起こり始めたら、身を起し、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているからです。》

人々が悩みのために気絶するほどの混乱に陥っている時、人の子（イエス・キリスト）が「雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを」人々は見る。

主イエスがこの世に最初に来られたのは、家畜小屋に救い主として誕生した時であった。それと全く対照的に、再び来られる時は大きな権威を有し、恐るべき審判者として来られる。その来臨は、ベツレヘムというイスラエルの一寒村での隠れた出来事ではなく、世界中が認めざるを得ない明らかな形で起こる。イエスを信じていない人々も、いやおうなく再臨のイエス・キリストを見なければならぬ（黙示録1:7）。

(3) いちじくの木の花芽が出る

《それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると、それ

を見て、すでに夏が近いことが、おのずから分かります。同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは神の国が近いことを知りなさい。》

主の再臨に近いことを示すもう1つのしるしは、《いちじくの木》の《芽》が出ることである。《いちじくの木》はイスラエルの民の象徴（もしくは型）である。イエスはここで、ご自分の再臨に先立って、いちじくの木から芽が出ると教えられた。イスラエル国家が何世紀にもわたって離散し、地上から忘れ去られた後、1948年に再建され、今では1つの国として認められていることには必ずや何かの意味があるはずである。

イスラエルの残りの者が回復する時が来る（ロマ9-11章）。これらは、キリストの栄光の御国がまもなく打ち立てられることのしるしである。

(4) 主のことばは決して消え去らない

《まことに、あなたがたに言います。すべてのことが起こるまで、この時代が過ぎ去ることは決してありません。天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。》

大空も宇宙もやがて《消え去る》。同様に、地球も今の状態のまま残ることはない。しかし、主イエスの預言が成就されずに終わることはない。

(5) 油断せずに祈っているようにとの警告

《あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされていて、その日が異のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。その日は、全地の表に住むすべての人に突然臨むのです。》
放蕩や深酒ということは、実際に酒によることもあるが、霊的放蕩や深酒のことで、御言葉を正しく受け取らず、適当に自分なりの解釈をするところから始まる。御言葉の水増しである。そうすると、自分の罪についての感覚が鈍くなり、どんどん御言葉から離れ、倫理感覚もおかしくなる。主イエスの再臨についての緊張感もなくなってしまい、神の御前に生きる信仰生活から外れ、未信者と余り変わらないものになってしまう。

(6) いつも目を覚まして祈っていなさい

《しかし、あなたがたは、必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。》

いつ主が来られてもよいように心の目を覚まし、祈っていることが出来るためには、主イエスの御言葉に耳を傾け、もうすぐ主が来られるのだということを現実のこととして受けとめなければならない。いつかは来られるだろうといった、いいかげんな気持ちではなく、今にも主は来られるのだという信仰が大切である。だからと言って、浮き足立つのではなく、しっかりと地に足を付け、頭を上げて、主が来られるのを待ち望むことである。

いつも主の御前に立って生きている人にとって、主が来られ、主とお会いすることは喜びであるはずである。

(7) 昼は宮で教え、夜はオリーブ山で過ごされた

《こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた。人々はみな朝早く、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとにやって来た。》

いずれの日も、主は神殿の敷地内で教え、《夜は》オリーブ山で眠られた。ご自分がお造りになった世界に家をお持ちにならなかった。多くの人々が、主の教えを新たに聞こうとして、朝早くから主のもとにやって来た。

(8) 空中再臨（携拳）と地上再臨の関係説明図

すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。（Iテサロニケ4:16-17）

